

ももたろう

松居 直 文

赤羽 末吉 画







ももたろう

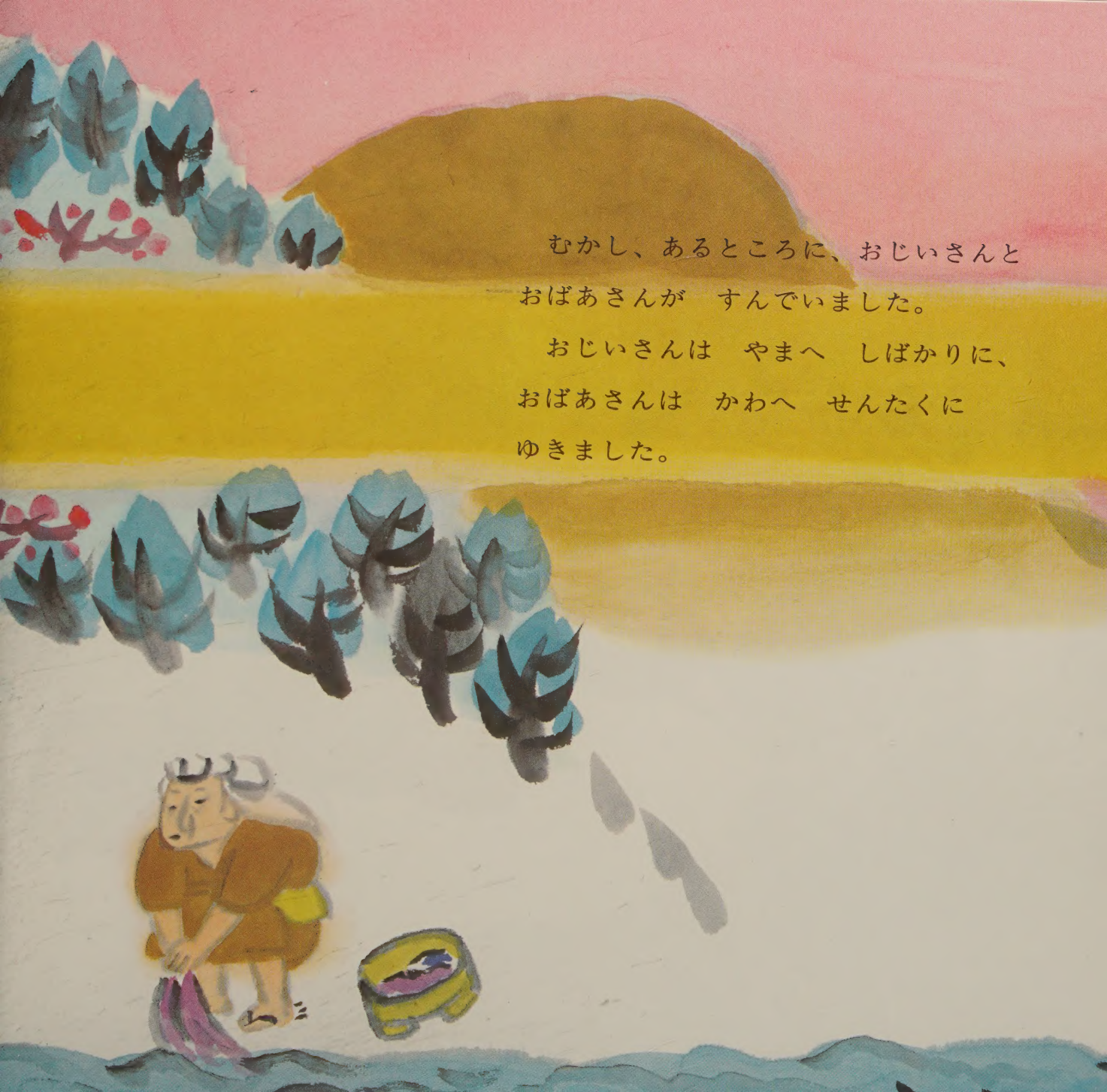


まつい ただし ふん／あかば すえきち え

題字 安永露子

福音館書店発行





むかし、あるところに、おじいさんと
おばあさんが すんでいました。

おじいさんは やまへ しばかりに、
おばあさんは かわへ せんたくに
ゆきました。

あるひ、おばあさんが かわで せんたくをしていると、
かわかみから、ももが つんぶく かんぶく
つんぶく かんぶくと ながれてきました。

おばあさんが ひろって たべてみると、
なんともかとも おいしい ももでした。



「なんとも うまい ももっこだ。
おじいさんにも、
もってってあげたいが……」
そうおもって、



おばあさんが、
「うーまい ももっこ、
こっちゃんこい。

にーがい ももっこ、
あっちゃんけ」と いうと、
おおきい うまそうな ももが、
おばあさんのほうへ
ながれてきました。





「これはまた
うまそうな ももっこだ」と、
おばあさんは ひろって
うちへ もってかえり、
だいじに しまいこんでおきました。



ばんがたになって、おじいさんが やまから
どっさり しばをせおって もどってきました。

「おばあさん、おばあさん、いまもどった。
のどがかわいてかなわん。みずを 一ぱい もらえんかなあ」と
いうと、おばあさんは、

「おじいさん、おじいさん、みずより よいものを
かわから ひろってきたで、それを おあがり」と いて、
とだなから おおきな ももを だしてきました。



ふたりが ももを わろうとすると、
ももが じゃくつと われて、
なかから かわいい おとこのこが、
ほおげあ ほおげあっと いって
うまれました。

おじいさんと おばあさんは、
「いややあ、これは たいへんじゃ」と、
おおさわぎをしました。それから、
「このこは、ももから うまれたのだから、
ももたろうと なをつけよう」と、
ももたろうと なづけました。





おじいさんと おばあさんは、
ふたりして、おかゆを たべさせたり、
さかなを たべさせたりして、
ももたろうを そだてました。



ももたろうは、
一ぱいたべると 一ぱいだけ、
二はいたべると 二はいだけ、
三ぱいたべると 三ぱいだけ、
おおきくなる。



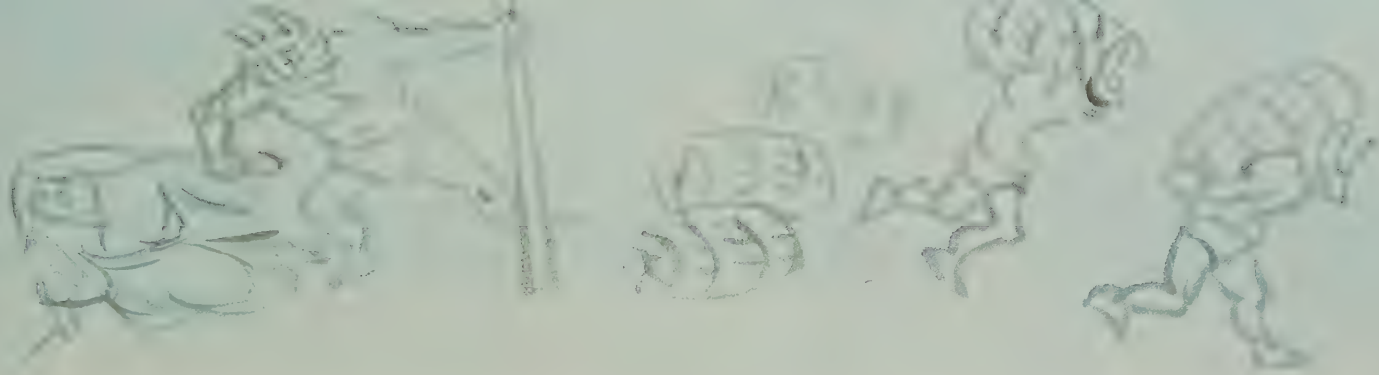
一を おしえれば 十まで わかる。

だんだん おおきくなって、
それはそれは ちからもち。
そのうえ、なんともかとも
かしこいこに なりました。

おじいさんと おばあさんは、
「ももたろうや、ももたろうや」と、
かわいがって かわいがって
いました。







あるひのこと、一わの からすが
ももたろうの うちのにわへ きて、
——おにがしまの おにがきて、
あっちゃむらで こめとった。
があー があー
こっちゃむらで しおとった。
があー があー
ひめを さろうて おにがしま。
があー があー があー
と なきました。

それをきくと ももたろうは、おじいさん おばあさんの ところへ行って、
ちゃんとすわって、りょうてをついて、

「おじいさん、おばあさん。わたしも おおきくなったので、おにがしまの

わるいおにを たいじしに ゆきたいと
おもいます。どうか、にっぽんいちの
きびだんごを こしらえてください」と
たのみました。

おじいさんも おばあさんも、

「どうして、どうして、おまえは まだ
としもとってないし、こどもだから、
おにになど かてるわけがない」と
いって とめたけれども、ももたろうは、
「いいや、いいや、おら、きっと
かてるから」と いって ききません。





とうとう、おじいさんも おばあさんも しかたなくなって、
「それほど いうなら、いってこい」と いって、
にっぽんいちのきびだんごを どっさり いっぱい こしらえて、
こしに さげさせ、あたらしい はちまき もたせ、
あたらしい はかま はかせ、かたな ささせて、
『にっぽんいちの ももたろう』と かいたはた もたせ、



「きをつけて いってこい。
おにを たいじしてくるのを まっているでなあ」
と、おくりだしました。



ももたろうが むらはずれまで くと、わんわん と いいながら
いぬが きました。

「ももたろうさん、ももたろうさん、いさんで どこへ おでかけです」

「おにがしまへ おにたいじ」



「こしにつけたのは なんですか」「にっぽんいちのきびだんご」
「一つ ください、おとします」「それでは おまえに
わけてやろう。これさえ たべれば 十にんりき」

ももたろうは こしの ふくろから きびだんごを 一つ だして、
いぬに やりました。



こうして、いぬといっしょにやまのほうへ
ゆくと、こんどは きやっきやっ と
さけびながら さるが きました。

「ももたろうさん、ももたろうさん、
いさんで どこへ おでかけです」



「おにがしまへ おにたいじ」

「こしにつけたのは なんですか」

「にっぽんいちのきびだんご」

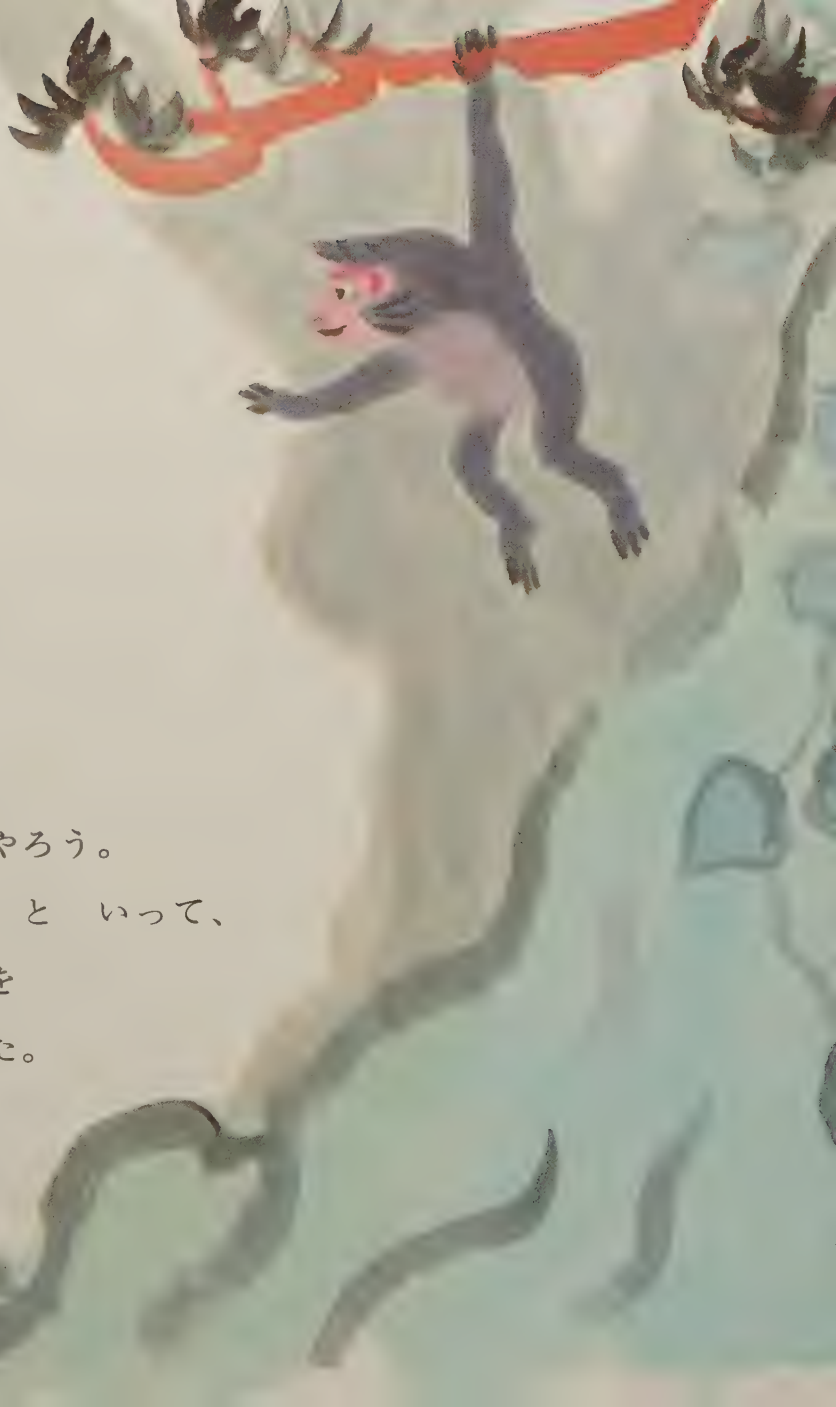
「一つ ください、おとします」

「それでは おまえにも わけてやろう。

これさえ たべれば 十にんりき」と いって、

こしの ふくろから きびだんごを

一つ だして、さるに やりました。





ももたろうは いぬと さるを つれて、
やまおくへ はいってゆきました。すると、
けーん けーん と きじが やってきました。

「ももたろうさん、ももたろうさん、
いさんで どこへ おでかけです」

「おにがしまへ おにたいじ」

「こしにつけたのは なんですか」

「にっぽんいちのきびだんご」

「一つ ください、おとします」

「それでは おまえにも わけてやろう。
これさえ たべれば 十にんりき」と いて、
また こしの ふくろから きびだんごを
一つ だして、きじに やりました。





ももたろうと いぬと さると きじは、きびだんご
たべたべ、おにがしま めぎして、やまこえ、たにこえ、







うみをこえ、ゆくがゆくが ゆくと——





おにがしまに つきました。

おにがしまには、おおきな もんが たっていました。
いぬが もんを どんどん と たたくと、なかから
「どーれ」と ちいさい あおおにが でてきました。
ももたろうは、

「おれは にっぽんいちのももたろう。おにたいじに きたから、
みな かくごしろ」と となりました。

それから、さるが へいを

よじのぼって もんを あける。

きじは そらから せめかかる。

ももたろうも かたなをぬいて、

いぬといっしょに かかってゆきました。

すると、そこらにいた おにどもは

おおさわぎして、おくのほうへ

にげてゆきました。







おくでは、おにのたいしょうが
けらいどもと さかもりの まっさいちゅう。
ももたろうが きたのを きいても、
「なに、ももたろうが なんだ」と
ばかにして、わりわりと かかってきました。

こっちの 四にんは、にっぽんいちの
きびだんごを どっさり たべてるもので、
なんびやくにんりき。おにどもを
かたっぱしから やっつけてしまいました。





おにのたいしょうは、ももたろうの まえへきて、てをついて、
おおきな めから なみだを ぽろぽろと こぼして、

「とても かないません。どうか いのちばかりは たすけてください。
いまからは もうきつと、わるいことはしません」と いて、
ももたろうに あやまりました。

ももたろうは、
「よし、いまから わるいことしないなら、いのちだけは たすけてやる」と、
おにどもを ゆるしてやりました。おには、

「おわびのしるしに、たからものは
みな さしあげます」と いて、
ありったけの たからものを
だしてきました。





ももたろうは、

「たからものは いらん。おひめさまを かえせ」と いいますと、
おには、「はいはい」と、おひめさまを かえました。





ももたろうは、おひめさまを たすけると、いぬと
さると きじをつれて、また、うみこえ たにこえ、
やまをこえ、うちへ かえってゆきました。



おじいさんと おばあさんは おおよろこびして、
ももたろうを むかえました。

それからは おにどもも こなくなり、
ももたろうは おひめさまを およめにもらって、
おじいさん おばあさんと、いつまでも
しあわせに くらしました。

めでたし めでたし。



松居 直（まつい ただし）

1926年京都に生まれた。同志社大学卒業後、出版・編集に従事する。
1969、1979年世界絵本原画展BIB国際審査委員。1981年にはスロヴァ
キア共和国文化省から「BIB特別功労賞」を贈られた。「だいくとおに
ろく」「こぶじいさま」「びかくんめをまわす」(福音館書店)などの絵
本をはじめ「絵本とは何か」「絵本を見る眼」「絵本を読む」(日本エデ
ィタースクール出版部)、「わたしの絵本論」(国土社)、また国語教科
書「にほんご」(福音館書店・共著)など著作・評論多数。東京都在住。

赤羽 末吉（あかば すえきち）

1910年、東京に生まれる。1959年、日本童画会展で茂田井賞受賞。
1962年、「日本の神話と伝説」で小学館児童出版文化賞佳作賞。また
1965年には、この絵本「ももたろう」と「白いりゅう黒いりゅう」
(岩波書店)で、それぞれサンケイ児童出版文化賞を受賞。1975年、
「スーホの白い馬」(福音館書店)で、ブルックリン美術館絵本賞受
賞。またそれまでの業績に対して、1980年度国際アンデルセン賞・
画家賞を受賞した。ほかに「ほしになったりゅうのきば」「かきじぞ
う」「つるにようぼう」(福音館書店)などの絵本が多数ある。1990年没。

ももたろう 松居直 文 赤羽末吉 画

NDC 913 40p 21×22cm 

1965年2月20日 発行 2012年5月10日 第120刷

発行所 株式会社 福音館書店 〒113-8686 東京都文京区本駒込6-6-3

電話 販売部 (03)3942-1226／編集部 (03)3942-9265

印刷 日本写真印刷 製本 多田製本

<http://www.fukuinkan.co.jp/>

ISBN978-4-8340-0039-9

MOMOTARO THE PEACH BOY - An Old Japanese Tale

Text © Tadashi Matsui 1965. Illustrations © Suekichi Akaba 1965.


Published by Fukuinkan Shoten, Publishers, Inc., Tokyo, 1965.

Printed in Japan

- 乱丁・落丁本は、小社出版部宛ご送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
- 紙のはしや本のかどで、手や指などを傷つけることがありますので、ご注意ください。





 福音館書店 定価(本体 1,100円+税)

ISBN978-4-8340-0039-9 C8795 ¥1100E

日本傑作絵本シリーズ

読んであげるなら 5才から

じぶんで読むなら 小学校中級むき



9784834000399



1928795011003



全国学校図書館協議会選定「基本図書」

全国学校図書館協議会第14回推薦

厚生省中央児童福祉審議会特別推薦

第12回サンケイ児童出版文化賞受賞

日本図書館協会選定

大阪市立中央図書館選定



08-CZR-178

